

### 三 保証としての霊

#### コリントの信徒への手紙 二 五章一節―十節

二〇〇八年九月二日礼拝説教

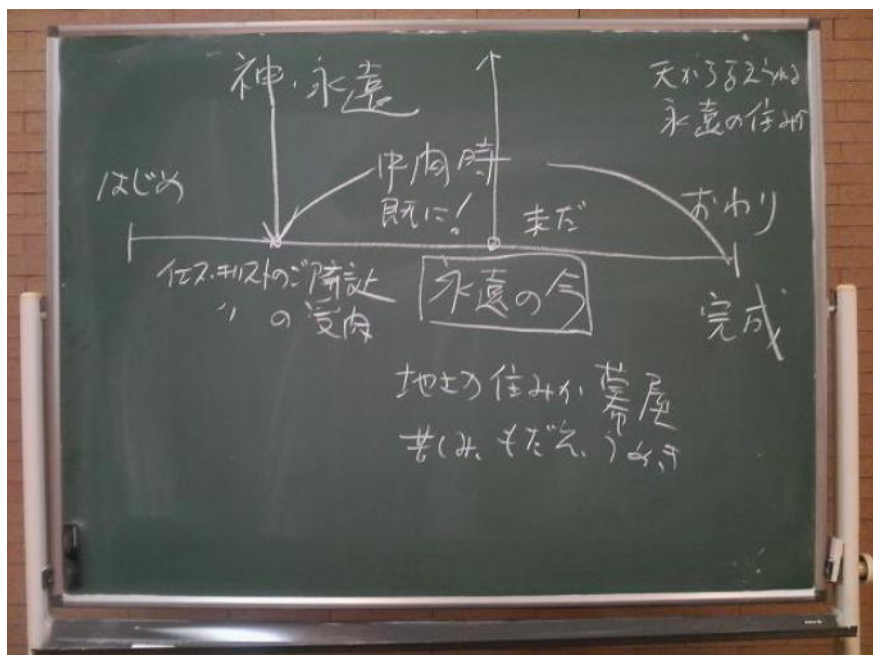
秋吉隆雄 牧師

教会の暦で今日の主の日に読むように定められている聖書は、コリントの信徒への手紙 二 五章一節から十節までです。このコリント書はパウロがコリント教会に宛てて書いた手紙であります。聖書の言葉は読んでもすぐに分かる言葉もあります。それは慰められる、励まされる力ある言葉としてわたしたちの心の中に響いてきます。けれども、反対に何を書いているのなかなか分からない言葉も沢山あります。それはまず時代が違います。また民族が違います。そして宗教的な事を書いてありますから、分からない、理解できないことが沢山あるのは当たり前と考えられます。例えば、夏目漱石は沢山の小説を書いています。夏目漱石は今から百年位前の小説家です。けれども、夏目漱石でさえも今日わたしたちはなかなか読みにくいのではないのでしょうか。生活環境が違い、ものの考え方が違うわけですから、すんなりとは入ってはこないところがあるでしょう。特に若い人には、あれほど自我に悩んだ小説家の思いというのはなかなか理解しにくい面があるだろうと思います。紫式部の源氏物語は有名でありますけれども、源氏物語は今からちょうど千年位前に書かれた小説です。原文を読むためには相当勉強していないと読めないと思います。現代訳した源氏物語であってもあの時代の背景が分からないと理解できないところが沢山あるわけです。同じ日本人が書いたものですけれども分からないわけです。パウロは紀元後五十年代、今から千九百五十年前、約二千年前の人間です。二千年前でありますから、ものの考え方や、生活や文化、これはもう全く違うわけです。しかもパウロは日本人ではなくてユダヤ人であります。更に彼は宗教的真理について彼が経験したことを書いているわけです。このパウロが書いたものを今日のわたしたちが読んですと胸に入るといえるのは、なかなか大変だろうということとは容易に想像することが出来ます。

今日与えられました御言葉、コリントの信徒への手紙 二 五章一節から十節まで、この部分は本当に難解で、読んで頭の中にすっと入るといことはまずないだろうと思います。けれども、ここに書かれている事はキリスト教信仰にとって大切なことだと私は思っています。そこで解りやすくするために、まず図解で説明したいと思います。これはパウロの言葉を理解するための基礎的な背景にあ

たる事柄であると思うからです。

聖書は創世記の最初に、「最初に、神は天地を創造された」という言葉から出発しています。最初に神さまは天と地とその中に住む全てのものを造られた。「初め」があるということは、必ず「終り」があるということを意味します。初めがあるから終りがある。聖書の歴史観は、循環する歴史観ではなくて、初めから終りに向かつて直線的に進む時間論です。終りは神による完成です。聖書の時間論はこのような神さまが最初に天地を創造して、終り・「完成」までを全責任を持って導かれる歴史です。これがわたしたちに与えられている歴史です。この歴史の中で時満ちて、神さまはひとり子イエス・キリストを遣わされました。それは、「永遠の神」が時間の中に交わったことです。この交わった時点が、イエス・キリストのご降誕、または神学的には「受肉」ということです。時間の中に永遠の神がぶつかった。このことを通して神さまは歴史の中・時間の中にわたしたちと一緒にいてくださるという奇跡が起こった、歴史の中に神が直接関わる救いが成就したという出来事、これがイエス・キリストの「御降誕」、クリスマスです。



現在のわたしたちは何処にいるかというと、ここ「現代」です。この時点は「永遠の今」という言葉で表現されます。わたしたちは神の子イエス・キリストを信じているわけです。ということは永遠と結び合っているということです。永遠と結び合っているわたしたちに救いの確かさが与えられているのです。

イエス・キリストの御降誕から、歴史が終わる・完成する終末の時間までの時間を「中間時」という言葉で神学的には表現しています。中間時はどのような時なのか、これはイエス・キリスト・永遠の神が時間の中に突入し、わたしたちと関わって下さったことによつて、わたしたちはすでに救われている、「既に救われている」という時です。何故ならば、わたしたちの生は空しく流される生ではなくて、イエス・キリストによる信仰によつて神に根拠を置く確かな生として捉えられるから、わたしたちは既に救われていると言えるわけです。けれども、皆さんがご承知のように、わたしたちの生きている生活は全き救いではないわけです。ですから、「未だ救いが完成していない」。「救いが完成する」のは終りの完成時です。永遠の今を生きているわたしたちは中間時に生きているわけです。これは、既に救われている、しかし、未だ全き救いではない。「未だ」と「既に」との緊張関係の中にわたしたちの生というものがある。これが中間時にあるわたしたちのあり方です。これが基本的にキリスト教の捉えている時間に対する考え方なのです。

パウロは、今日の御言葉の中で、わたしたちの今生きている所は「地上の住みか・幕屋」と言っています。幕屋はテントです。イスラエルの民が出エジプトした時にテントを張って、たたんで、また張って、たたんで移動したわけです。幕屋はユダヤ人にとっては地上に住んでいることの証の言葉です。これに対向するものが「天から与えられる永遠の住みか」という言葉です。これは歴史の終り、終末の時に全きかたちとして与えられる神さまからの祝福の救いです。パウロは、わたしたちは地上の住みか・幕屋にある。しかし、わたしたちは最終的には天から与えられる永遠の住みかを望んで生きていると言っています。そして、パウロは、今日の御言葉で、地上の住みか・幕屋に住んでいるわたしたちには、苦しみがあり、もだえがあり、うめきがあると述べています。ここでパウロは、地上の住みか・幕屋の中に住んでいるわたしたちは、苦しみ、もだえ、うめいているけれども、そのわたしたちには天から与えられる永遠の住みかがすっぽり上から被せられる、着せられると言っているのです。そういう事柄が本当に起こるのだと、わたしたちは知

っている、望んでいる。これは「既に」と「未だ」との緊張関係の中で「中間時」を捉えているパウロの言葉として理解されるわけです。

皆さん、今日与えられましたコリントの信徒への手紙 二 五章一節から五節までをご覧くださいと思います。今申し上げた事柄を頭に置いて読んで頂きたいと思います。「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によつて建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。わたしたちは、天から与えられる住みかを上に着たいと切に願つて、この地上の幕屋にあつて苦しみもだえています。それを脱いでも、わたしたちは裸のままではおりません。この幕屋に住むわたしたちは重荷を負つてうめいておりますが、それは、地上の住みかを脱ぎ捨てたいからではありません。死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまうために、天から与えられる住みかを上に着たいからです。わたしたちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは、神です。神は、その保証として“霊”を与えてくださったのです。」

今まで申し上げましたように、地上の幕屋の上に天から与えられる永遠の住みかを着ると言うのです。そのような救いを与えられるにふさわしい者としてわたしたちは神さまから備えられている。そしてこの出来事の保証として聖霊がわたしたち与えられているのだと言っているわけです。保証というのは、手付金という意味です。大きな買い物をする場合には全額は払わないで、手付金を払うというわけです。払うことによつて全部のものを買ったこととの確認をするわけです。パウロは、「天から与えられる永遠の住みか、これはまだ全てはもらっていない」と言うわけです。けれども、聖霊という保証によつて手付金としてこのことが保証されているのだ。そのような聖霊がわたしたちに与えられている。だからわたしたちは地上の幕屋にあるけれども、安心なのだ。これが、パウロが宣べ伝えようとしていることです。

今日の聖書のちよつと前、コリントの信徒への手紙 二 四章の十六節から十八節をご覧くださいと思います。ここには、パウロの有名な言葉ですが、こう書いています。「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永

遠に存続するからです。」

外なる人・地上の住みか・幕屋、これは衰えてゆくのです。けれども、内なる人、イエス・キリストに結び合った、永遠と結び合っている信仰において神に向かつてわたしたちは日々新たにされていく。ですから、わたしたちが地上の幕屋で負っている艱難は、これは一時のものであつて、天から与えられる住みかを着るときの栄光に比べると何ほどのものでもないと言っているわけです。わたしたちは見えるものではなく、見えないもの、神に目を注いで生きる。見えるもの・地上のものはすべて過ぎ去るけれども、見えないもの・永遠に向かったわたしたちの視点は神にあつて確かなものとされていくと言っています。ですから、わたしたちは地上にあるわけですが、歴史の終りの完成を望んで、そこで支えられている栄光を信じて今を生きていく。そのような信仰を聖霊がわたしたちに保証しているのだとパウロは言っています。勿論、このような滅び去る者が栄光の命を与えられる、その出来事がどうしたら起こるのかというと、言うまでもなくイエス・キリストの十字架と復活の出来事です。イエス・キリストは地上における幕屋で苦しみ、もだえて、そして十字架にかかつて亡くなられました。亡くなつて死んで終つたかというところではなかった。そうではなくて神がこのイエス・キリストを死の中からよみがえらせて神のあざやかな命を与えられたわけです。わたしたちはこのイエス・キリストの十字架と復活を信じる。この信仰を根拠にするときに、地上の住みか・幕屋は苦しみ、もだえ、うめく、そのような生であるけれども、必ずやイエス・キリストが永遠の命に与つたように、天から与えられる永遠の住みかをわたしたちはすつぱり着ることが出来る。そのことの保証として聖霊を神さまが与えてくださっている。これを信じる。これが、パウロが宣べ伝えようとしている信仰です。

後半の五章六節から十節までをご覧くださいと思います。「それで、わたしたちはいつも心強いのですが、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。目に見えるものによらず、信仰によつて歩んでいるからです。わたしたちは、心強い。そして、体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」

パウロは目が悪かったのですね。ですから、彼自身が文字を書くことがほとんどありませんでした。パウロが口述するわけです。口述したものを隣りの秘書が書いていくわけです。そうしてできたのがパウロの手紙の大半です。今読みました五章六節から十節までは口述筆記の典型的な例ではないかと思っています。論理が非常に飛んでいるわけです。文字を書いた場合には、文字を見えますから論理的に事柄を書けるわけですけれども、口述した場合には物事がぼんぼんと飛んでゆくわけです。そういう響きがこの箇所にはにじみ出ていると思います。ここでパウロは、「わたしたちは心強い」と二回も言っています。何故心強いのか。それは、保証としての霊が与えられているから、わたしたちは神のものとされている。だから、わたしたちは心強いと言っているのです。このときパウロの心は揺れています。どういうところが揺れているかと言うと、体を住みかとしているかぎり、主から離れていることも知っています。体を住みかとしている、肉体を持つて時間の中に生きているその時には、不信仰になつてキリストから離れる、この不信仰は分かっていると言うのです。これは当たり前です。わたしたちは四六時中、神やキリストのことを考えて生きているわけではありません。色々なことを考えて生きているわけです。ですから、体を持つて生きる限り、信仰深いということはあり得ないわけです。みんな不信仰なわけです。神さまから離れてくるのです。そのことをパウロは知っているということです。だからこそパウロはこうも言うのです。「体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます。」体を離れて、ひゅつと永遠に向かつて飛び上がったらそこにキリストがおられるわけですから、その方がいいと言っているのです。肉を持つて生きる限り主から離れる、だから、肉を離れてキリストと共にいたい。これがわたしの願いだと言っているわけです。この問題は来週の主日礼拝で、フィリピ書からもう一度学びたいと思います。パウロの本音はそうだということを言っています。この考え方は当時のギリシャ・ローマ世界で通用する思想であつたと思います。ギリシャ・ローマで語られた当時の思想信仰というものは、肉のものはくだらないというわけです。だから、肉から離れて天にある霊的な世界・魂の世界が崇高な世界である。それをあこがれる。こういうことを当時の人々は真剣に考えたわけです。パウロも今読んだところではそういうことを言っているわけです。「体を離れて、主のもとに住むことをむしろ望んでいます」と。ところが、これから先がパウロの他と違うところです。それは九節からです。「だから、体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。なぜなら、

わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」

パウロは地上の生の意味を語るわけです。神さまは天上の世界だけではない。地上の世界も見えておられる。だから、地上の世界でわたしたちがどのように生きたか、それを神さまが見ておられる。あなたがどのように苦しんで、もだえて、うめいてきたか、そのうめき、苦しみ、それさえも神さまは見えておられるのだから、そのうめきも神さまの前で最終的にはつきりと裁かれるのですと言っているわけです。ということは、地上のこの生そのものも神さまの前にひとえに意味があるということを言っているわけです。これが当時の思想とパウロの思想と全く違うところです。パウロは信仰義認、信じた者はそれで救われるということを中心に伝道した使徒でありました。けれども、「信じて救われる」と、彼が語ったのはただその抽象的な救いだけではないのです。救われた人間はこの歴史に対して、時代の中でどのように生きるか、そのことも神さまの前に明らかにされていくと言っているわけです。ですから、私は今日の御言葉は大変インパクトがあると思います。わたしたちの信仰は永遠の世界を望むわけです。上からすっぽりと栄光の体に変えられるのです。それを望んで生きているわけです。しかし、地上にあつてはやはり苦しみ、もだえ、うめきながら生きて行くわけですけれども、その苦しみ、もだえ、うめきこそが神さまにしっかりと見られているということです。だからその生をしっかりと生きなさいということです。これがパウロのわたしたちへの勧めの言葉です。体をもって生きている限りは、わたしたちは全き救いというものはないわけで、辛いことが沢山あるわけです。けれども、辛くていいのです。わたしたちは栄光の体に必ず変えられる。それは、イエス・キリストの十字架と復活のゆえにそのような体に変えられるわけです。それを信じている。だから、今の与えられている生活に対して誠実に神さまの前に生きる。これがわたしたちの信仰のあり方です。聖霊がそのような生き方をわたしたちに保証してください。これが何よりの喜びです。これをしっかりと受けとめて一緒に信仰生活を励んでいきたいと思えます。